

「Therapeutic Gastrointestinal Endoscopy」 Second Edition

edited by Stephen E. Silvis

愛知県がんセンター病院副部長

伊 藤 克 昭

治療内視鏡に携わる者にとって必携の書

第2版である。まず、文字が大きくなり、取っつきがよく、読みやすくなった。第1版が出版されてから5年、その間に、内視鏡治療も大きく変貌した。多くの手技は更に洗練され、臨床医学におけるそれぞれの役割も明確となってきたための改訂である。

さて、第1章はブジー療法である。本邦では馴染みが薄いのが、欧米では歴史が古く、さすがに記述には重みがある。本邦では10年ほど前から徐々に普及し始めたが、まだその知識は十分ではない。本章では、種々のブジーが図示され、その使用方法、注意点が詳細に述べられている。ブジーの握り方から、劣化したゴムブジーや金属ブジーのガイドワイヤー先端の折れの危険性まで写真で示し解説している。また、何か月

あるいは何年もかかって形成された狭窄を一気に正常な内腔径にまで拡張することを戒め、“rule of threes”の重要性を説いている。ブジー療法施行者は一読の価値がある。更に、バルーン拡張についてもその位置づけに言及加筆され、狭窄治療は大幅な増頁となっている。

第2章の食道静脈瘤硬化療法も加筆増頁され、手技のみならず、静脈瘤の病態・病因、硬化療法後の静脈瘤消失にまで言及している。また、今回の改訂で静脈瘤の内視鏡所見記載法について日本のものが紹介されている。

第3章の異物除去、第4章の内視鏡的胃瘻空腸瘻造設には大きな変化はないが、異物としてコカイン密輸者対策が追加された。米国らしくて、興味深い。瘻造設の手技は図が増え理解しやすくなっている。

第5章の血管病変に対するレーザ

ー治療はそのままだが、消化性潰瘍出血に対するレーザー治療の章は今回削除され、高周波、ヒートプローブと共に熱による止血法(第6章)として一括された。第8章では局注と局所止血法が取り上げられている。本邦では馴染みの薄い治療法もあり参考になる。局注療法は改訂で日本の論文が多く引用されている。

胃ポリペクトミー(第7章)には大きな変化なく、大腸ポリペクトミー(第12章)も筆者が変わったが内容的には大差ない。乳頭切開術(第9章)、胆道減圧法(第10章)の記述にも大きな変化はないが、胆管腫瘍に対する腔内照射が追加された。新しく、胆道鏡の章(第11章)が設けられ、山川先生が執筆している。

癌に対するレーザー治療(第13章)は臨床経験の増加で内容が一新されている。

本書は内視鏡診断学に習熟し、内視鏡学後期の教育を受ける者のために用意されたとされている。写真と図が豊富であるのみならず、引用論文も多く、本邦では、治療内視鏡の指導者や研究者にとって必読の書となろう。また、治療内視鏡に携わる者にとってもよい手引となる。

● 411 pp. with figs. 2nd ed. 1990
¥ 20,000

Igaku-Shoin Medical Publishers,
Inc., New York

医学書院洋書部 (☎ 03-3817-5670)